

# 踏み跡 < My mountains >

北アルプス	剣岳から槍ヶ岳へ大縦走	No.091
-------	-------------	--------

これは恩田と二人で挑む初の大プロジェクト。剣岳を基点とすることはかなり前から決めてあったが、剣岳へのルートも、早月尾根にするか室堂にするか決めかねていた。馬場島から早月尾根に取り付くルートなどめったに使えるルートではないので、是非この機会に体験したいと思いましたが……。

全体の計画と日程は以下のように決まった。( < >内は一日のコースタイム)

- 7月29日 出発
- 7月30日 富山→室堂→剣沢→剣岳ピストン <9.5時間>
- 7月31日 剣沢→立山→ザラ峠→五色ヶ原 <9.5時間>
- 8月1日 五色ヶ原→薬師岳→太郎兵衛平 <14時間>
- 8月2日 太郎兵衛平→黒部五郎岳→三俣蓮華岳→双六岳 <13時間>
- 8月3日 双六岳→槍ヶ岳→天狗原 <10時間>
- 8月4日 天狗原→キレット→北穂→奥穂→天狗のコル <10時間>
- 8月5日 天狗のコル→西穂→上高地→帰京 <10時間>
- 8月6日 予備日



コースタイムが示すように決して楽ではない。だが、剣・薬師・黒部五郎・三俣蓮華・槍……。名前を聞きその姿を想像しただけで陶醉しそうな山々、これらの山に巡り会えると思えば苦勞など厭うべくもない。薬師を越える日、黒部五郎と三俣蓮華を越える日が一番の難関ではないかと話し合った。

「登山革命」と称して軽便テント(ツェルト)を作った我々はその実績で、テトロン綿を使った950グラムのセミシュラフを作ってこの山行で試すことにした。

7月27日 ファイナルミーティング、同28日パッキング。重量は約20Kgか?

ゲンを担いで伸ばしている髭も二日目、天気は何かよかろうと言う感じ。国立の藪蚊ともしばらくは別居だ。

## 昭和42年7月29日 <出発>

落雷で列車ダイヤは大乱れ、上野駅はホームからこぼれ落ちそうな程の人の波。鵜飼が来てタバコの差し入れをしてくれた。19時30分発急行越前は約一時間遅れて出発。勿論座れっこない。この不利な肉体条件のため早くも予定

を変更。剣岳ピストンは明後日に回し明日は剣沢までとした。ダイヤの乱れの関係で、長野までは走ったり止まったりの繰り返し。途中で何とか床に座り込むことに成功したが、とても眠るところまでは行きそうもない。途中で隙を狙って空間を確保し、横になることができた。例によって出かける前に憶えこんだ駅名を数えながら眠気を誘ってみる。

上野・尾久・赤羽・大宮・宮原・上尾・桶川・北本・鴻巣・吹上・行田・熊谷……信濃追分・御代田・平原・小

## 踏み跡 < My mountains >

諸・滋野・田中……名立・筒石・能生・浦本・梶屋敷・糸魚川……黒部・魚津・滑川・水橋・東富山・富山。  
直江津を過ぎたあたりから列車はようやく普通のスピードになってきた。

### 昭和42年7月30日 <富山→千寿が原→美女平→室堂→剣沢> 快晴>

富山着6時17分。見知らぬ町に降り立って旅のひとつの朝の散歩でも…と優雅に行けばいいのだが、そんなことをしていたら置いていかれてしまう。国鉄富山駅を出てすぐ左の電鉄富山駅に駆け込むと、6時25分発千寿ヶ原行と書いた看板が目に入った。夜行列車から降りた雑踏の中にはまだこの看板に気がついていない人が多い。この機を逃さず、それ行け!と人垣をかき分けて飛び乗った。東京から室堂までの通しの切符を買っておいたので、富山駅で切符を買うための行列に並ばずに済んだ。我々が飛び乗るとすぐに電車は走り出した。

富山平野の緑の中を南東へ、常願寺川に沿うようになると窓の外は徐々に山らしくなり、窓から入る風もことのほかヒヤリとして涼しい。

千寿ヶ原7時50分、ここでケーブルカーに乗り換えるのだが目の前の駅舎に入るためには駅前広場をうねっている数百メートルになんなんとする行列の末端に並ばなければならない。

約二時間半にわたる牛歩を続ける間退屈さを紛らわせるようなものは何一つない。菓子パンと牛乳の朝食を済ませて、数枚の暑中見舞い状を出して……。後から後から到着する電車から吐き出される乗客の列が末尾に加わり、列はどんどん長くなっていく。いい加減馬鹿馬鹿しくなる頃ようやく順番が回ってきたが、一番最後に窓から乗り込み滑り込みセーフ。ケーブルカーの後尾に接続されたトロッコには山のように積み上げられたキスリング。トンネルを潜り、急峻な登りを走り、10分足らずで海拔970mの美女平に到着。もう太陽は頭上でかんかん照りの10時過ぎ。

ここでも手際よく動き、室堂行バスの行列に整列。列の途中に秤が置いてあり荷物の計量をするようになっている。重量に応じた荷物代を払う。ここで別送される荷物と別れることになる。

体の方はなんと上野を出てから14時間ぶりに座席という物にありつくことができた。ホッと胸をなでおろして腰を下ろすと同時に睡魔が襲ってきた。原生林を抜けてさらに上へ上へ。称名の滝、弥陀ヶ原……こんなに高い所まで、こんなに深い山奥までバスが入れるなんて考えても見なかった昔。

室堂、海拔2430m。別便で送られてきた埃を浴びて真っ白になったキスリングと再会。寝不足の体には残酷すぎる灼熱の陽光。ここでの眺めは本山行の第一日目にふさわしい脳裏に焼きつく絶景。大日岳を左端に右へ視線を移していくと、雷鳥沢、立山連山、一ノ越……、パノラマそのもの。そして山肌の褐色と残雪の白さ、ハイマツだろうか濃緑の、そして何とも表現のしようがないほどの紺碧の空。11時10分行動開始。

残雪から水が滴り落ちるみくりが池で昼食と小一時間の休憩。

雷鳥沢へ下り、雷鳥荘の前で沢を渡り剣御前小屋への登りに入るが、下山してくる連中が多くて思うように足が運ばない。

雷鳥沢から一時間で海拔2754mの剣御前小屋。ザラザラとした小岩を混ぜた砂地となり、ひときわ高い所に来たような気がする。ここから剣沢を緩やかに下り、14時10分剣沢天幕場に到着。ここは海拔2500m雪渓の水の冷たさに思わず顔がほころんでくる。蔵前工業高校のパーティからプラムを貰ったり歓談したりの後天幕設営。



前剣、剣、八峰を従えて、日本最北の3000m峰(\*注)の剣岳は微塵も揺るがぬいでたちで剣沢を俯瞰している感がある。(右写真:剣沢天幕場にて)

15時より食事の支度に入り、食事が済んだ後食料購入費の精算(一人当たり2260円)と明日のスケジ

## 踏み跡 < My mountains >

ユーロ確認。明日は剣と大日のピストン、4時出発とする。荷物が軽いのがうれしい。

### 昭和42年7月31日 < 剣沢→剣岳→剣御前→奥大日岳→剣御前→別山→剣沢 > 快晴

起床2時20分、快晴の星空。3時45分星空の下、ヘッドランプを付けて出発。夏とは言ってもかなり肌寒い。剣山荘の前を通過して前剣へ。日が上るにつれて後立山の稜線が黒々とその姿を現してくる。中でも鹿島槍と五龍が特に目立つ。その光景は見た者にしかわからぬ神々しさだ。前剣(2813m)4時40分通過。剣岳5時35分、3033m(\*註)。黒部の谷を挟んで後立山の山々は勿論のこと立山連山から薬師・黒部五郎・三俣蓮華・槍・穂高と我々が歩いて行くべき山なみ、それよりも遠く燕・餓鬼・常念、さらに遠く笠・御岳・乗鞍、そして妙高も戸隠も……。数えていたらきりが無いほどに連なる山々。山頂の静けさの中でイワヒバリの唄、耳を傾けてみると「ツ、ツ、ツルギ、ツルギ」と聴こえてくる。早月尾根を覗いてみると、さほどの悪さではなさそうに見える。だが、池ノ谷と東大谷に挟まれた尾根は長く長く伸びている。毛勝三山の中腹に気流の変化によるものか一筋の雲ができて、わずかずつ動いている。

6時15分に頂上を出発、下りに入る。そろそろ登ってくる人が多くなってきた。目の前でイワツバメの燕返し。左手に剣沢の広がり、その向こうに鹿島槍。

剣御前小屋から西へ400mの下りで室堂乗越(2350m)9時30分。ここからの眺め、弥陀ヶ原の広大な大平原と一筋流れる称名川、砂塵を巻き上げて走る一台のバス。

小さな雪渓で食事と約一時間の休憩。朝が早かったので何となく疲れが出てきた。恩田は昼寝、こちらは水遊び。昼前なのにもう剣は雲の中に消えてしまった。

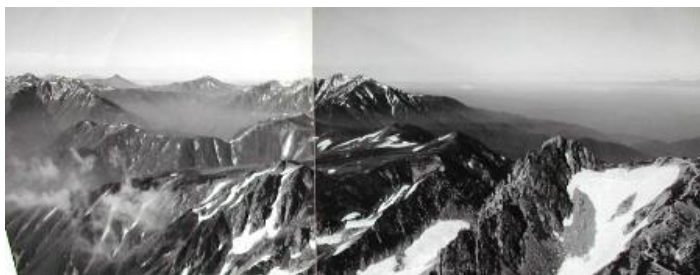
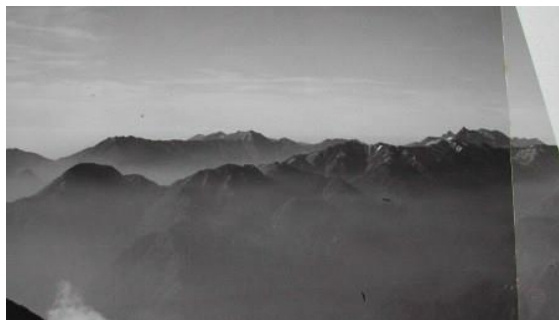
雪渓にザックをデポして、空身で奥大日岳(2606m)をピストン。だが残念ながらガスで眺望は得られず。剣御前小屋前に戻ると13時半、レモンを食べて一息。明日のために別山(2874m)だけピストンして剣沢の天幕場に14時50分帰着。ひと休みのあと夕食の仕度に入り、17時には食事を終了し雑談。

ハツ峰で遭難(転落)があったらしく、遅くまで騒がしかった。今夜も素晴らしい星空。朝の出発を早くすることで稜線の混雑が避けられ、スムーズに運んだような気がする。明日も小屋泊まりの客が動き出す前に一の越を通過してしまう方が得策と考え、早起きすることに決定。

### 昭和42年8月1日 < 剣沢→立山→ザラ峠→五色ヶ原 > 晴のち雨

起床2時、星は出ているが何となく気がかりな雲が出ている。4時に出発。

4時40分別山分岐、ここから立山の連山が始まり、富士の折立・大汝・雄山と3000m近い高さの連続。花崗岩の白砂は靴底にマッチして歩きやすい。真砂岳(2861m)は5時35分、雄山(3003m)6時35分。山頂ががやけに賑わっているのが不思議に思ってみたら、頂上の神社でお賽銭を払った人だけが頂上を踏めるようになっていた。



ばかばかしいので四枚つなぎのパノラマ写真撮影に挑戦してみた。

(上の写真はその一部:6時35分 雄山からの百万ドルの大パノラマ)

<左の写真:野口五郎から槍・穂高連峰> <右の写真:鷲羽から三俣蓮華・黒部五郎・薬師等>

朝7時前、針の木岳以北の後立山連峰は逆光に黒々とし、一方黒部五郎や薬師岳は陽光をたっぷり浴びて輝くような山肌。一ノ越から浄土山への登り、これで室堂付近の景色ともお別れ。7時15分雄山を出発。

## 踏み跡 < My mountains >

浄土山8時17分、尖塔のような竜王岳を往復して氷砂糖の小休止。笠ヶ岳の形が良いのに惚れ惚れして眺め入ってしまう。8時50分出発。

黒部湖の水面、雄大なる薬師岳、眼下に広がる五色ヶ原、雲の上の白山。

ザラ峠(2353m)は通過。立山温泉からの道を合わせて約150mの登りで、海拔2500mの大草原五色ヶ原に到着、11時15分。小屋の周囲は整地してなく、水場もない。空は重々しく雲が立ち込め、今にも泣き出しそうな状況。約一時間うろうろした末、やむなく五色ヶ原の一隅に天幕を張ることにした。その直後、遠雷とともに雨、雷は南の方で高く大きく鳴り響いている。

(後日談:この時西穂独標で松本深志高校のパーティが遭難した)

落ち着いて降っている雨で天幕が鳴り響くのを聴きながら横になって雑談していると、厚生省と営林署の人が来て、「ここは幕営禁止だ」と言う。この雨の中で動けるはずがない。構わずい続けたら再度尋ねてきて始末書をとられた。北アルプスは不便なところだ、どこでも幕営すると言うわけにはいかない。

心境は、「明日の天気を祈る」ということに尽きる。明日は最大の難関と見ている「薬師越え」。

始末書をとられた代わりに、周りに天幕がひとつもなく、遠雷も消えて静かな夜を迎えることになった。

17時には夕食を終了し18時30分就寝。

### 昭和42年8月2日 <五色ヶ原→越中沢岳→薬師岳→薬師峠> 快晴

起床2時30分、出発4時20分。かなり冷え込んだ、天気は上々。

五色ヶ原の端あたりから、大阪のダイハツのパーティ(3人)と前になったり後ろになつたり行軍。

鳶山(2616m)4時35分。これを越えると五色ヶ原ともお別れになる。

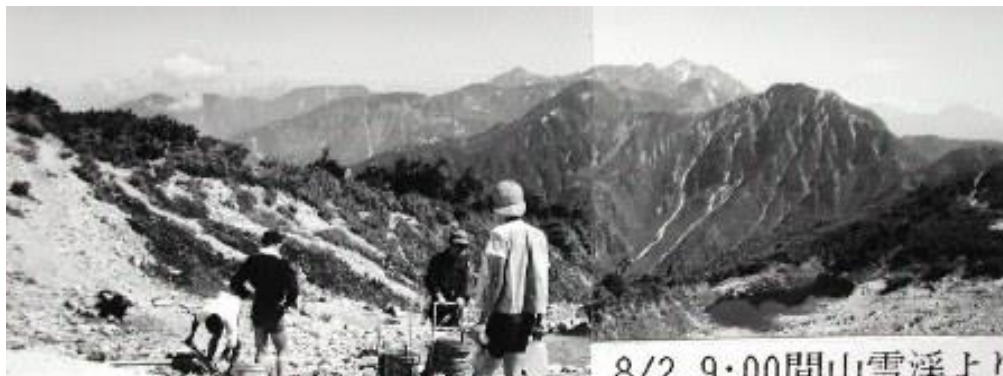
越中沢岳(2591.4m)5時50分、ハイマツ越しに見る薬師は手に取るような近さ。それにしても「大きい」としか言いようのない、そして優雅さも持っている薬師岳。6時08分先へ進む。

スゴでワンピッチ、間山雪渓でワンピッチ・・・三ピッチで登るとする。薬師にばかり気をとられている目を黒部側に移すと、赤牛岳のどっしりとした山容。

スゴ乗越でレモンを食べて気合を入れ、間山雪渓をさしての登りの始まり。レモンのおかげで一時間半で間山雪渓に到着、9時。音をたてて雪渓から流れ出る水のほとりてひといき。この日のアルバイトのために用意したモモの缶詰を開く。北に目を向けると、越中沢岳の向こうに立山連峰が遠くなってしまい、まさに昨日の

景色。

スゴ小屋の人が樽に水を詰めて背負子で背負って下るところを見送り、9時35分我々も薬師に向けて出発。



上の写真:<間山雪渓>樽に水を詰める小屋の人剣・立山遠望手前に大きい越中沢岳

北薬師岳の手前のピーク(2832m)10時35分、空腹に耐え切れず昼食。ガスが出始め、あたりは何も見えず。ガスの切れ間に時々姿を見せる頂上の景色が僅かながら闘志を盛り上げてくれる。11時20分出発。昼食から約一時間で薬師岳に到着、12時20分。予想以上に頂上は近かった。2926mの高さ、ガスは切れて申し分ない眺め。期待もし心配もした薬師が今自分たちの足の下にあるとわかると、互いに頬がゆるみ握手。こんなに早く着けるとは思わなかったし、もっと苦しんだ末に着くところだと思っていたのでにわか余力が感じられてきた。水晶・赤牛がどっかり腰を据えて、その直下に雲ノ平の湿原が光り輝いて見える。今日二個目のレモンを食べて、40分間の休憩。

## 踏み跡 < My mountains >

(右写真:薬師岳頂上) 難関を突破して足取りも軽く13時に出発。愛知大学のパーティが迷い込んで遭難したと言われるハイマツの稜線を左に見やりながら一時間余りで標高差600mを下ると薬師峠。

地図上の2282mのポイントになる。14時15分、きれいな天幕場で豊富な水が気に入った。今日の宿泊場所はここに決定し、ラジオ体操で体をほぐして幕営開始。

ダイハツの三人は我々が食事を始める頃に到着した。

「早かったですね」と驚いていた。

16時10分から夕食。夕食を食べながら、今日を振り返り、明日を考える雑談。

明日は黒部五郎・三俣蓮華の巨峰二峰を越えなければならないので、まだ憂鬱な気分が残る。しかし、今日の薬師越えの調子から見るとなんとか行けそうな気もしてくる。

女ばかりの大パーティ共立薬大 WV の賑やかな食事が終わると静かな夜になった。樹林帯で過ごす夜は今回の旅では初めてだ。



### 昭和42年8月3日 <薬師峠→黒部五郎岳→三俣蓮華岳> 晴のち小雨

次なる難関突破を目指して、起床1時40分。真っ暗闇の中を3時40分に出発。太郎兵衛平を通過する頃によろやく日の出。



太郎兵衛平から北ノ俣岳にかけて、海拔2500mを越える稜線とは思えぬような大平原。西部劇にでも出てきそうな砂礫とハイマツの大平原の果てに黒く大きく黒部五郎岳、その右にやさしいカーブで笠ヶ岳、さらにその右に木曾御岳。今上ったばかりの太陽の斜光に小石ひとつひとつが浮き上がるように見える。

(左写真:朝の太郎兵衛平)

路傍でのスケッチを試みたが、早朝の涼しさにはかなわず薬師岳の輪郭だけで中止。北ノ俣岳(2661.3m)・赤木岳(2622m)を越えて中の俣乗越に7時10分。

黒部五郎の肩に8時30分到着。ザックをデポして黒部五郎岳頂上(2839.7m)を往復し9時05分出発。

金木戸川の谷は雲勝ちではあるが、時折姿を見せる槍ヶ岳は近く、我々の旅が四日目に入りかなり南下してきたことを体で感じるができる。

(右写真:黒部五郎から、近くなった槍・穂高)

肩から大きなカールの五郎沢に下り、雪渓で昼食。なかなか見事な雪渓だ。9時30分から10時15分迄休憩。どこかのパーティが雪上訓練をやっているのが見える。正直なところ、いくらか疲れが出てきた感じがする。でも、三俣蓮華さえ越えてしまえば安心できるのでもうひと頑張り。



カールの下から沢沿いに草むらの中の小道を登り、稜線の黒部乗越へ。そして今日の最後のアルバイト、三俣蓮華への登り。樹林、灌木帯を抜けて砂礫の尾根になる頃からガスが一面に立ち込め、日の光をさえぎり何とも不快な空模様。

三俣蓮華の肩12時10分、小屋への道と頂上への道の分岐。互いに足が重く歩くのが嫌になってきた。声を掛け合いながら歩くが長続きしない。小岩の影で一休み。レモンを出して食べたが、もはやレモンぐらいでは闘志は沸いてこない。恩田も疲れきっているようだ。そのうちに雨が降り始めてきた。休んでいても何の進展

## 踏み跡 < My mountains >

もありはしない。歩くのが嫌になったとは言っても、ここで無抵抗に静止しては何も得られないどころか体力と気力を失っていくばかり。我が身と相棒とに気合を入れつつ三俣蓮華小屋への道に入る。

2700m付近をずっと巻いて小屋までの小一時間、このワンピッチの長かったこと。

13時20分、三俣蓮華小屋天幕場に到着。かなり疲労しきってしまった恩田のためにすぐに天幕を張り、腰を下ろす。小雨が上り、目の前の鷲羽岳が鮮やかだったが、恩田は横になってしまった。

夕食は一人で作って一人で食べることになってしまった。目の前に相棒が居ながら一人で黙々と食べる、味気なく寂しく美味しくない夕食。

連日の早起きがたたって、今日かくもドツと疲れが出たのであろう。明日はどうなるだろうか。

話し相手もなく、自分も疲れているので眠りつくのは早かった。

### 昭和42年8月4日 <三俣蓮華→西鎌尾根→槍ヶ岳→西鎌尾根→三俣蓮華> 快晴

起床4時20分、こんなに遅くまで寝ていたのは始めてだ。天気は良いが雲が多い。

恩田はまだ食欲がなく今日は行動不可能。一人で朝食の後、ハイマツの中でキジを撃ちながら対策検討。可能なかぎりパーティの分割はしないことを目標にし、恩田に回復のための一日の休養日を提供しようという考えから、今日は私が一人で槍ヶ岳のピストンをしようというアイデアが浮上してきた。ここからの槍のピストンはハードではあるが決して難しいことではない。初期の目標の穂高連峰にはたどり着けないが、今回逃してもまだ登る機会はあるだろうから諦めがつく。おまけに、ここからならば下山も一日で可能だ。

キジ場から天幕に戻り早速恩田の同意を得て準備開始。恩田は計画が途中で崩れることになったことを残念がり、恐縮しきりだった。

6時に天幕場を出発。サブザックの中はヤッケ・ポンチョ・水・食料。二尺のキスリングから開放された両方の肩は快適ではあるが、背中が何となく心もとない。恩田が寝ているテントを一度振り返り、それから歩き出した。双六の小屋への途中、雪渓から流れ出る水によってできた湿原にムツとするように咲き乱れるコバイケイソウ。7時20分、双六小屋着。空の雲はどこかへ消え、また立山の空のようにカーっとした太陽の猛攻。昨夜グッスリ寝たし、ザックは軽いしで足取りは軽い。

樺沢岳(2755m)は7時45分に通過、硫黄乗越(2600m)8時50分。小さな雪渓で水を補給して一休み。氷砂糖を舐めながら行く先に目をやればやはりもう目の前にそびえて高い。約20分休み、9時10分出発。いよいよ西鎌尾根の登りに突入。

北鎌尾根が段々に間近になり、2700m付近で千丈沢からの宮田新道を合わせ、道は石積みと岩礫、もう槍の懐に入ったような感じで興奮してくる自分がわかる。頂上の小屋が見えてからが、暑くて長かった。槍の肩、槍ヶ岳山荘前10時30分、所要時間は4時間、予想より早い到着。肩と頂上は人がウジャウジャしていて落ち着かないので、ひとわり景色を楽しんだ後で飛騨乗越寄りに数分歩き、槍沢側に突き出した岩の上に腰をかけて食事。

大きなカールの槍沢はひととおり見渡せるが、常念山脈方面と蒲田川の谷は雲で何も見えず。見えるのは野口五郎方面と黒部五郎方面が少しだけ。陽射しは暖かいが風が冷たい。たとえ一瞬でも太陽が隠れると

ヒヤリと感じる。

食事の後頂上へ。鎖が付いたりして、ミーちゃんやハーちゃんも来ていて、なかなか行列が進まない。面倒なので左手の岩場をよじ登って、一気に天辺へ。

11時30分、槍ヶ岳山頂(3180m)。ガスで眺めは何もない。祠がひとつとお賽銭がいっぱい。中にきれいな拾円硬貨があったので剣沢で拾った拾円硬貨と取替えっこ。かくして拾円玉は剣から槍への旅を終えた。

さて、そろそろ下るかなと振り向くと、岩場の下の方から



## 踏み跡 < My mountains >

どこかで聞いたことがあるような話し声。登ってくる行列を待っていると、どうも会社の同じ課の小坂さんに似た関西弁。横顔を見ると似ている。正面に回って再確認。半信半疑で思い切って、「小坂さんじゃないですか?」「よう、小林君か〜、なあんだ来てたのかあ、それにしても変なところで会ったなあ、それにキタネー顔だなあ」

同じ会社の同じ部署の人と、しかもよりもよって槍ヶ岳の頂上で出会うとは思ってもみなかった。用品部の二人と一緒にいた。今日は横尾に下るとのこと。頂上で奇縁の記念撮影。(前頁写真)

汚い顔と言われたので、磁石の裏蓋を鏡にして顔を見ると確かにそのとおり。顔は日焼けして真っ黒だし、ひげは2cmぐらいに伸びている。赤い短パンも赤茶色、

完全に野人化してしまっている。槍のようにきれいなアンちゃんネエちゃんが多く集まる場所ではどうしてもこの手の乞食ルックは目立つものらしい。肩まで下ってしばらく雑談の後、横尾へ下る三人と別れて再び西鎌尾根へ、12時35分出発。千丈沢乗越は12時55分に通過。ガスってきて蒲田川側は何も見えず冷え冷えするような風。一方の千丈沢側はまだかんかん照り。北鎌尾根がどんどん遠くなっていく。

双六小屋14時25分、1時間50分で来てしまった。もう炊事を始めている天幕を見たら、にわかには腹が減ってきた。レモンを食べて、今朝のコバイケイソウの群落を通り抜け、15時40分三俣蓮華の天幕場に到着。結局今日の三俣蓮華・槍ヶ岳間のピストンは、往路4時間10分・復路2時間55分(トータル7時間05分)で終了した。

天幕の外から「おお、行ってきたぞー」と声をかけると元気な返事が返ってきた。中に入ってみると夕食の支度を始めている。一日の休養の甲斐があったようだ。

16時30分夕食。西鎌尾根の登りのこと、キレットのこと、コバイケイソウのこと、槍のてっぺんでの出来事などなど、夕食しながらの話題は豊富だ。

明日は湯俣に下り葛温泉にでも一泊して明後日東京へ帰ろうか、ということになった。下山するのが惜しいような気もするが、最終日を畳の上で過ごすのも悪くない。とにかく今日はゆっくり寝ようということになり、19時就寝。

### 昭和42年8月5日 <三俣蓮華→湯俣→葛温泉→信濃大町> 快晴

起床5時20分、昨日の槍のピストンの疲れがいくらか残っているようで腰が痛い。

食事の後天幕を撤収し、出発は7時。鷲羽岳の腹、標高 2500m付近を巻き気味にゆっくりとした下り。



右手に赤岳と硫黄尾根、その尾根越しに槍と北鎌尾根。

鷲羽池の直下あたりから道は徐々に小尾根を下り始め、

海拔1800m付近で湯俣川の水辺に到着。ここからが大変。日はカンカンと照りつけ、硫黄分を含んだ黄赤土の小道。

道は湯俣川のV字谷をへつるように付いている。水は硫黄分が強く、飲用不適。

(左写真:湯俣への下りから そろそろ槍の見納めか)

やがて爽やかな木陰がある道になる頃、右手より純水の小沢を入れ、当然のように休憩。時計を見ると11時半、

昼食。恩田は昨日丸一日何も食べていないので腹が減ってたまらないと言う。昼食としてはデラックスすぎる献立。飯を炊いて、カレーライスにキャベツのマヨネーズあえ。足元の草むらに蜂達のざわめきを聞きながら二時間半の大休止。14時、満腹で出発。

昼食後も再びカンカン照りの湯俣川沿いの道が続く。

湯俣温泉付近では河原の至る所に湯が湧き出ている、小石を積んだ手作りの野天風呂がそこかしこにある。一度はキャンプして見たい所だ。

## 踏み跡 < My mountains >

河原の天然温泉を過ぎてしばらくで、長い長いトロッコの軌道歩きが始まる。肩は痛いし、足の方も疲れが出てきたし、陽射しは強いしでまったく閉口。やがて軌道は木立を潜るようにはなったが、何度か通り過ぎるトロッコを避けるのに一苦勞。特に下りのトロッコは恐ろしい。かすかなクラクションとレールの響きだけを合図にジェットコースターのような勢いで走り抜ける。命からがら逃げるように避けなければならない。七倉で水を飲ませてもらい、葛温泉に17時15分到着。いやな軌道歩きが終わり、そして今回の縦走の終着点に着いたなと思うとにわかに足の筋肉がだるくなってきた。

残念ながら葛温泉の旅館はすべて満員とのこと。やむを得ず大町での宿泊に変更し、バス停へ。バスは17時45分に発車。6日ぶりのバス。揺れる振動が何とはなしに心をくすぐる。葛温泉と後の山なみがバスの車窓から遠ざかるにつれて「ああ、俺達はやったんだ、終わったんだ」という実感がこみ上げて、何とも言えぬおかしな気分。

信濃大町到着18時30分。街にはもう灯りがついている。駅前の案内所で「喜楽」という宿を紹介してもらおう。一泊二食付きで1000円。

風呂、一週間の垢を落とすのにどれぐらい苦勞したかを書いたらちよいと品が落ちるのでやめておく。結論として、きれいな体になった。3cmほどに伸びたひげは記念のために剃らずに家まで持ち帰る。夕食、自炊せずに食べる食事は格別。食後は街角の喫茶店でコーヒーも飲み、デラックスな夕餉を終えてふっくらした蒲団で22時に就寝。

### 昭和42年8月6日 <信濃大町→八王子→国立→自宅> 晴

汗のにおいのしないきれいなシャツで旅館を出発。駅に荷物を預けて街中を散歩。コーヒー狂の恩田に付き合い喫茶店へ行き、その後おみやげに信州りんごを購入。

信濃大町10時47分発の第一白馬は糸魚川から来るディーゼルカー。座席も立ち席もほぼ満員。これは参ったなと思いきや、有明でかなりの乗客が下車して座席にありつくことができた。北陸線方面からの客がこれから山に入るべく、かなり乗っているようだ。松本でも大分降りて行った。

松本で五目めし弁当を買い昼食。(松本城の絵で瀬戸物の碗に入っている)

雲を被った北アルプス連峰を窓辺に見送り、ディーゼルカーは諏訪盆地・甲府盆地と走り抜けて、東京へ東京へ。車中では、昨日までのこと、明日からのこと、涼風にひげを漂わせながらの会話と僅かなまどろみ。

15時45分八王子で下車。新宿まで行く恩田とガッチリ握手。健闘をたたえあい、協力に感謝しあい、成果に満足しあう握手。何か大変大きな収穫を得たような心地よさで家路に着いた。

以上

注: 剣岳の高さ

昭和42年には 3033mとされていた。その後の測量で3000mに満たぬことが判明。

前時代の測量との差異が日本列島の物理的な変化によるものか?

再測量後の高さは、国土地理院発行の「日本の山岳標高一覧」によると 2998mとなっている。

(修正・更新:2023年11月)